
日本カレドニア学会
2016年度大会プログラム

—NP0日本スコットランド協会協賛—

日時：2016年9月10日（土）10時00分

会場：拓殖大学文京キャンパス（東京メトロ丸ノ内線「茗荷谷」駅徒歩5分）

〒112-8585東京都文京区小日向3-4-14

日本カレドニア学会
Japan Caledonia Society

（事務局）

立教女学院短期大学 小林麻衣子研究室

（大会事務局）

関東学園大学 照山顕人研究室

ateruyam@kanto-gakuen.ac.jp

<http://www.ne.jp/asahi/caledonia/jcs/index.html>

日本カレドニア学会
2016年度大会プログラム
—NP0日本スコットランド協会協賛—

日時：2016年9月10日（土）10 時00分

会場：拓殖大学 文京キャンパス C館4階407教室

（東京メトロ丸ノ内線「茗荷谷」駅徒歩5分）

〒112-8585東京都文京区小日向3-4-14

1. 受付（会場前） 10時00分

2. 開会式 10時30分

司会 江藤 秀一（常葉学園大学）

挨拶 本学会代表幹事 照山 顕人（関東学園大学）

NP0日本スコットランド協会 理事 三鍋 昌春

3. 研究発表 10時45分～12時15分

1) 司会 立野 晴子（拓殖大学）

「スコットランドの食文化に見られるケルト的要素 —その地域性と民族性—」

野口 結加（日本C I 協会 リマ・クッキングスクール）

2) 司会 中尾 正史（青山学院大学）

「江戸時代を見たラナルド・マクドナルド」

照山 直子（亜細亜大学）

<休憩>

12時15分～13時15分

—2016年度総会—

13時15分～13時45分

司会 阿部 陽子（成蹊大学）

4. 研究発表 13時45分～15時15分

司会 佐藤 猛郎（元つくば国際大学）

3) 「*The Heart of Midlothian*におけるThe Porteous Riotsの位置」

村松 瞳子（日本大学大学院博士後期課程）

司会 小林 麻衣子（立教女学院短期大学）

4) 「スコット？ノルマン？イングリッシュ？」

12世紀の帰属意識 —ロバート・ブルース1世を例として—

坂下 拓治（慶應義塾大学大学院後期博士課程）

5. 講演 司会 照山 顕人（関東学園大学）

15時30分～16時30分

「サー・ウォルター・スコットに引きつけられた私」

佐藤 猛郎 氏（元つくば国際大学）

（元NP0日本スコットランド協会代表理事）

講師プロフィール：佐藤 猛郎 （さとう たけろう）

1931年東京生まれ。東京教育大学（現在の筑波大学）英文科卒業。元つくば国際大学教授。

サー・ウォルター・スコットの文学を研究。元日本カレドニア学会幹事。元NP0日本スコットランド協会代表理事。

著書に、『ウォルター・スコット：最後の吟遊詩人の歌—作品研究』（評論社、1983）、

翻訳に

スコット作『マーミオン』（成美堂、1995）、スコット作『湖上の美人』（あるば書房、2002）、小説『ウェイヴァリー』（万葉舎、2009）、共訳に、J. G. ロックハート著『ウォルター・スコット伝』（彩流社、2001）、それに文部省の補助を受けた『A Concordance to the Poetical Works of Sir Walter Scott』（リール出版、1996）などがある。

6. 閉会挨拶 米山 優子（静岡県立大学）

懇親会

時間：17時00分から19時00分 会費：6,000円

会場：拓殖大学文京キャンパスC館7F Cラウンジ

お知らせ

1. 参加は無料です。
2. 入会ご希望の方は、年会費として5千円（学生は3千円）をお納めください。
3. 大会終了後、懇親会を行います。会員はもちろん、会員以外の方もご遠慮なくご参加ください。
4. 当日の昼食は、会場近くに食事ができる場所がございます。
5. 当日、学会誌CALEDONIAのバックナンバーを一部200円で販売いたします。
6. 次回大会は来年9月頃に関西で開催予定です。研究発表を希望される会員、その他お問い合わせは事務局までご連絡ください。

準備の都合上、出欠のご連絡を同封のハガキで**9月1日（木）**までにお知らせください

大会準備委員会：立野晴子・照山顕人・照山直子・中尾正史・阿部陽子

1. 野口結加 「スコットランドの食文化に見られるケルト的要素 ～その地域性と民族性～」

一般的に、食文化は、人々が暮らす地域の気候風土という生活条件の中で、日々の工夫が積み重なって築き上げられる。スコットランドの場合も基本的には同様であるが、ケルト文化圏という範疇で見直してみると、地域性だけでなく、その民族性の基盤が根底にあるのではないかと推測される。そこで、スコットランドの伝統的な食文化に見られるケルト的要素を調理器具、年中行事などの具体例を挙げながら、その影響と変容の過程を考察する。スコットランドの食文化をより多角的に捉えると共にケルト文化の実例を検証することがその目的である。

2. 照山直子 「江戸時代を見たラナルド・マクドナルド」

マシュー・ペリーが艦隊を率いて浦賀を訪れる数年前に、遭難を装って単身蝦夷の利尻島に上陸、長崎に送られオランダ語通詞たちに英語を教えた男がいた。スコットランド人を父に、ネイティブ・アメリカンの酋長の娘を母に持つラナルド・マクドナルドだ。

アイヌに助けられ、日本の役人とも友好的関係を築いた。長崎に送られてからは座敷牢でペリー来訪時の通訳森山栄之助らに英語を教えることになった。

一見、無謀で危険な企てをものの見事に成功させ、日本に数か月滞在、無事帰国することができたのは、彼がスコットランドの血を引いていること、あるいはネイティブ・アメリカンの血を引いていることと関係があるのだろうか。実際に遭難して長崎に送られた異国人はたくさん記録に残っているが、英語を教える役割を与えられたのは彼だけである。

異国の傑物、マクドナルドについて、日本へのこだわりと、その逞しさを育んだルーツをたどってみたい。

3. 村松瞳子 「*The Heart of Midlothian*におけるThe Porteous Riotsの位置」

Walter Scott (1771-1832) 作 *The Heart of Midlothian* 『ミドロージアの心臓』(1818) は、1736年にスコットランドで起こったポーティウス暴動事件 (Porteous Riots) に関連する小説である。史実に残る大きな事件を扱うと同時に、当時の女性たちが個人的に抱えていた深刻な問題についても取り上げている点が特徴である。その女性の個人的問題というのは、ウォーカー姉妹という実在した二人の姉妹の物語がもとになっている。嬰兒殺しの罪により死刑宣告を受けた妹の特赦状を得るため、その姉はスコットランドからロンドンまで徒歩で旅をし、その特赦状を獲得した、という実際にあった出来事を、人づてに聞いて、感銘を受けたスコットが、名前と事実関係に変更を加えてこの小説の中に描いたのである。本発表では、スコットがなぜこの2つの事件を組み合わせたのか、ポーティウス暴動事件は作品においてどのような位置にあるのか、ということについて考察する。

4. 坂下拓治 「スコット？ノルマン？イングリッシュ？ 12世紀の帰属意識
—ロバート・ブルース1世を例として—」

14世紀にスコットランドの王となるブルース家は真に「スコットランド的」と言えるかもしれない。しかし、スコットランドにおける彼らの起源は、ロバート・ブルース1世が王デヴィッド1世によって所領を与えられた12世紀初頭までさかのぼることができるだけである。彼らは、その頃にスコットランドにやって来た多くの「アングロ・ノルマン人」に属し、スコットランドとイングランドの両方に所領を保有する所謂「クロス・ボーダー」の人であったことがよく知られている。本報告は「スコットランド対イングランド」と形容されることの多い1138年のスタンダードの戦いにおけるロバート・ブルース1世についての叙述を分析することで、12世紀の「ボーダー」という存在自体を相対化することを目的としている。当時の彼らのような人たちに対して「スコット人」や「ノルマン人」「イングランド人」といったナショナルな区別を与えることが歴史的に危ういことであることを示す。



○東京メトロ丸ノ内線「茗荷谷（みょうがだに）駅」徒歩5分
駅からの経路は上記地図を参照ください。